これから博士号取得を目指す皆さんへ

名古屋大学大学院環境学研究科社会学講座助教
中根 多恵

2015 年 2 月に論文「多国籍ユニオニズムにおける運動資源の動員構造と戦略的アプローチの解明：GU の事例分析をとおして」で博士（社会学）を取得いたしました。学位取得に至るまで指導教員の丹辺先生をはじめ、社会学講座の先生方、皆様には大変お世話になりました。まずは、この場を借りて感謝申し上げます。

現在、お世話になった社会学講座に助教として携わるなかで、院生室にいることがとにかく苦手だった学生時代の私とはちがい、朝早くから夜遅くまで日々研究に励む後輩の皆さんの姿を拝見してはいつも脱帽しております。博士号取得に向けて努力を重ねる後輩の皆さんに私ができることは、私の経験をさらけだし、博士号取得に向けて少しでも自信を持っていただくことだと勝手ながら自負しています。以下、私の大学院進学から博士号取得にいたるまでを振り返り、その試行錯誤の過程で学んだことをお話したいと思います。

さて、すでに皆さんもご存知のとおり、学術的研究を遂行するには、語学力、洞察力、論理的思考力を要し、さらに社会学的な研究には、社会学的想像力、コミュニケーション能力などさまざまなスキルが必要とされます。私の場合は、これらのほとんどにおいてマイナスからのスタートでした。修士課程に進学した当初から、「絶対博士課程に進学する！」とひとり意気込んでいたにもかかわらず、当時の私は「研究」を「遂行」するどころか、簡単なレジュメを作成することすらままならぬ状態で、社会学の基礎知識はおろか、作文力や語学力もなく、まともに文献も読めない、まさに絵に描いたような劣等生でした。M1 の夏休みに入り、仲の良い同期たちの修士論文構想が着々とまとまっていくなか、私はというと、ツクツクボウシの鳴く季節になっても一向に論文テーマすら決まる気配もなく、丹辺先生にはご迷惑をおかけしてばかりでした。ただ、私の場合は、最初から失うほどの自信もプライドも持ちあわせておらず、落ちるほどのレベルの高さもなかったことが、かえってその後の研究の原動力になっていたように思います。良くも悪くもある意味「開き直り」ながら、手探りの状態で研究に必要な勉強を重ねました。今振り返ると、マイナスからのスタートを切った私が一定の「研究力」を身につけることができたのは、（とてもシンプルですが）ゼミへ参加したからに他なりません。複数のゼミに 2 年間しっかり参加すれば、英語文献を講読する力と先行研究を批判的に読む力を身につけ、「論文とは何か」を理解することができます。

こうして、ようやくレジュメ作成のコツを掴み、先行研究のナナメ読みができ、自分なりの問いをたてられるようになってきたころ、次なる課題にさしかかりました。フィールドワークの実践です。これぱかりはいくら机の上で勉強しても身につくものではなく、とりあえず、何も考えずにフィールドに飛び込むことになりました。私の調査先は大阪にあ

る小さな労働組合で、メンバーの多くが「外国人・男性・労働者」であるなか、「日本人・女性・学生」の私が「調査」を目的として彼らと関わることは簡単ではなく、いろいろな失敗もしました。参与観察法調査は、ラポールを形成し十分なデータを集めるまでに時間を要するし、自身の明らかにしたい問いに直結しないデータにふれる時間も多いため、忍耐が必要な場合もあります。私は時間をかけて調査を繰り返すうちに自分の調査目的を見失わないように、調査そのものよりも調査の「前後」におこなう作業に時間をかけていました。つまり、データを得るための事前準備と、データを得たあとの整理です。このとき、論文の枠組みや仮説と生データのあいだを行ったりきたりしながら、「論証するために何がまだ足りないのか」ということだけを考えるようにしていました。すごく当たり前のことですが、この作業を繰り返すことで、より充実した調査をすることができるようになりました。

博士後期課程へ進学したあとは、ひたすら学会活動を軸に、常にアウトプットすることを意識した研究生活を送りました。他大学の先生や院生とのつながりができ始めたのもこの時期でした。博士号取得を目指すのであれば、なるべく早いうちから学会や研究会に積極的に足を運ぶことをおススメします。私にとって、M1 のときに初めて日本社会学会に足を運んで学会の空気に触れたことは、その後のモチベーションにつながりましたし、そこで交わされた議論やささいな何気ない世間話ですら、自身の研究のインスピレーションに直結してきました。また、マイペースな私の場合は、年間の研究計画を立てることが大の苦手でしたので、大会報告や論文投稿など学会のイベントを絶対的な軸にして年間のスケジュールを組むようにしていました。博士論文には具体的な期日がありませんので、研究計画は良くも悪くも壮大で果てしなく無謀なものになりがちです。私は「アウトプットする期日」を自ら設定し、逆算的に具体的な計画を練ることで、着実に研究を進めることができました。このとき大切なことは、「もうちょっと時間があったらいいものが書けるのに…」と思わないこと、報告・投稿辞退という手段で「今回は見送る」という選択肢を絶対に作らないこと、そしてその代わり、自分で決めた期日まではとことん練り上げる、ということだと思います。簡単そうなことですが、「自分との約束を守る」ということは意外と難しいことではないでしょうか。

こうして学会活動を続けながら、2013 年 10 月に博士論文審査セミナーを通過し、いよいよ博士論文をとことん仕上げる執筆生活がはじまりました。翌年 4 月からは非常勤講師としてのお仕事も始まり、さらに 7 月からは研究員として他分野の研究プロジェクトにも携わっていましたが、博士論文以外の業務があることで週単位のスケジュールや生活時間の管理がしやすく、学生のころよりもかえって集中して執筆することができました。この年は 1 年のあいだ、予備審査と執筆を繰り返していましたが、執筆時間以外は論文のことをほとんど考えずに普段どおりの生活を送っていました。博士論文を執筆することは決して特別なことではありません。生活のすべてを犠牲にして心身ともにボロボロになりながら書き上げるのではなく、まずは心身のバランス、強い精神力と健康な状態を保ちながら

日々フラットに生活することを何よりも大切にしてほしいです。反対に、そうでなければ、博士論文を書き上げることは難しいと思います。せっかくなら楽しみながら執筆できる方法も見つけてみてください。ちなみに私の場合は、パソコンから離れ、真っ白なノートに手描きで論文の構想や分析のメモをすることが好きでした（これは今も実施しています)。

ずいぶんとお恥ずかしい話もしましたが、要するに、データ収集も研究計画も普段の生活も「無理をせず、メリハリをつけること」が何よりも大切なのかなと思います。最後に、この拙い文章が少しでも皆さんの研究生活のヒントになれば幸いです。皆さまのご健闘を心よりお祈りしております。

第 15 回　名古屋大学社会学会大会・総会　プログラム

日　　時　　2015 年 7 月 23 日（木）　15：30～
会　　場　　名古屋大学　文学部　講義棟 1 階　127 講義室

報告

１．谷川　彩月　　手段として選択される「有機農業」的手法と
　　その意義

２．甕　佳代子　　女性の昇進を阻むもの～公務員のキャリア形成と
　　意識改革

３．伊藤　綾香　　「共働」実践における対等性の模索
　　―事業所「すずらん」の事例から―

４．文　捷　　中国人留学生の起業にみる社会的ネットワークと起業奨励政策

５．後藤　悠里　　後発性という観点からの障害者差別禁止法制定過程の考察
　　―香港及び韓国の事例から―